

筆談援助の会を訪問しました

今回訪問した「筆談援助の会」の事務局は、木更津市畑沢にあります。平成18年4月に、それまで相談支援の場で「筆談」を行って来たメンバーが集まって会を立ち上げました。会のスタッフの活動の場は、千葉だけでなく、東京、大阪、福岡などにも広がっているそうです。

エコロ福祉基金助成金は、2019年度に千葉で行われる2回の活動及び、パンフレットの作成に使われました。



<筆談って何だろう？>

筆談とは主に聴力にハンディのある人達が、紙に文字を書いて伝える方法として知られています。

一方、この会が行っている「筆談」とは、自閉症など言葉の表出に困難のある人が、言葉に代わるコミュニケーションの手段の一つとして用いるものです。手を添えることで、彼らがもともと持っている豊かな内面を引き出し、文章表現に発展させていくと考えられています。

<第1回説明会>

私達が取材におじゃましたのは、11月9日木更津市金田地域交流センターで行われた第1回説明会です。まず始めに「筆談」を実践している会員の体験談を聞きました。精神的に不安定で、たびたびパニックを起こしていた青年の話です。

「筆談」の援助を受けて自分の思いを表現できるようになり、彼はなぜパニックになってしまうのかを、援助者に伝えることができるようになったこと。そしてさらに筆談体験を積み重ねる事により、彼は理解されているという安心感からか、パニックに陥ることがなくなり、安定した生活が送れるようになったということでした。

<心が通うのは言葉だけではない>

次に、言葉を用いなくても、相手を感じ取ることができる、というワークを行いました。

始めに、椅子に背中合わせに座って、相手のぬくもりや安心感を受け取る体験をしました。

次はフロアに立ち、2人でヒモの両端を持ち合い、目をつむって無言でお互いに適度な張りを保ったり緩めたりして、どんな感じがしたかを伝え合いました。

はじめは違和感がありましたが、不思議と相手の暖かさが伝わって来ることが体験できました。

<A子さんの思い>

最後に、筆談援助を20年以上受けているA子さんからの挨拶が、私達の目の前で行われました。初めて目にする実際の筆談です。

あとで直筆を見せていただきましたら、「たくさんのことを あなたたちがかんがえてくれて とてもうれしいです。きょう きて よかったです。ありがとうございます。」と、書かれていました。

表面上は、不可解な行動を取っているように見える彼らの心の内を知り、深く考えさせられた取材でした。

ライターチーム 伊地知 ふみこ

